

ヒロインとしての魔女：『らくだい魔女はプリンセス』を中心に

谷口, 秀子

九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門 : 教授 : 英文学, ジェンダー, 児童文学

<https://doi.org/10.15017/3419>

出版情報 : 言語文化論究. 22, pp.41-47, 2007-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

ヒロインとしての魔女

——『らくだ魔女はプリンセス』を中心に——

谷口秀子

1. はじめに

以前からその傾向は見られたものの、魔法使いを主人公にした『ハリー・ポッター』の世界的なヒット以降、日本では、魔女を主人公にした読み物や漫画が以前にも増して数多く出版されている。魔女を主人公あるいは重要な登場人物にした作品は、この数年の間に出版された作品の中で、かなりの割合を占めており、その多くは、児童・ヤングアダルト向けの作品である。

欧米、特にイギリスにおいては、魔女を主人公や主要な登場人物にしたおとぎ話や物語は少なくないが、文化的、歴史的に西洋的な魔女の伝統が存在しない日本の児童文学やポップカルチャーにおける、この「魔女ブーム」とも呼べるほどの魔女へ傾倒は注目に値する。果たして、現代の、特に最近の日本において、魔女とはどのように捉えられているのであろうか。

小論においては、現代の日本において出版されている児童向けの作品に頻繁に登場する魔女像とはどのようなものか、作品の中で魔女はどのように扱われているのか、魔女がヒロインであることの必要性や意味があるのかという観点から、魔女を主人公とする最新の作品のひとつである『らくだ魔女はプリンセス』を中心に、現代の日本において受け入れられている魔女像のひとつについて考察を加える。

2. 魔女のイメージ

ヨーロッパの歴史や文化の観点から言えば、魔女には暗いイメージがある。中・近世のヨーロッパの人々にとっては、魔女は恐怖と嫌悪の対象であった。魔女の原型は、太古までさかのぼる薬を調合して病気を癒したり、呪術を使うとされる女性たちであるが、このような女性たちは、14世紀になると、教会によって反キリスト教的な異端者として烙印を押されることになる。そして、魔女は、悪魔と結託して人々に呪いをかける邪悪な存在であるとして、魔女を弾劾する魔女狩りが行われ、多くの女性が魔女として処刑された。¹⁾ (現在では、このような魔女狩りは、ヨーロッパに古くからあった女性嫌悪の表れであるという解釈がなされるなど、中世の魔女および魔女狩りについてのジェンダー的な考察も日本も含め世界中で広く行われている。)

また、グリム童話をはじめとする西洋のおとぎ話の中にも、魔女は登場し、その多くは、お姫さまである清純なヒロインに悪をなす、あるいは男性主人公の成功を阻む邪悪な存在として描かれている。おとぎ話においては、美しく気だての良いヒロインとそのヒロインの対極に置かれる邪悪な魔女という二分化された女性像がよく見られるが、このような聖女と魔女というステレオタイプの女性観は、現代でも厳然として存在し、男性の主人公があこがれる「清らかな」女性（聖女）と男性主人公の行く手を阻み、彼の成功の邪魔をする「邪悪な」女性（魔女）というパターンは、小説や映画やドラマではおなじみのものであろう。一方で、悪をなす「魔女」は、ヒロインにはない

魅力や活力を持つ登場人物であることも少なくない。たとえば、『白雪姫』においては、主人公の白雪姫は、きわめて平板なヒロインであり、気だてが良いが主体性や行動力に欠け、男性依存的である。一方、白雪姫の命をねらう継母は、悪意に満ちてはいるものの、きわめて主体的であり、行動的である。

また、現代のヨーロッパにおける、魔女を扱った作品には、中・近世的な魔女のイメージを受け継いだ作品も多く存在するものの、特にファンタジー文学の盛んなイギリスにおいて、『ミルドレッドの魔女学校』のミルドレッドや『ハリー・ポッター』のハーマイオニーのような、活発で明るい善意の魔女が描かれる作品も少なくない。

3. 最近の魔女を扱った作品と『らくだ魔女はプリンセス』

最近の日本の児童文学や漫画において、魔女を主人公にした作品の多さが目立っている。2006年に出版された児童・ヤングアダルト向けの作品のうち、魔女を扱った作品の例としては、以下のようなものがある。

- ・高山栄子『魔界屋リリー 小さな天才魔女』
- ・つくもようこ『魔女館へようこそ』
- ・成田サトコ『らくだ魔女はプリンセス』
- ・野梨原花南『侯爵夫妻の物語～よかったり悪かったりする魔女～』
- ・藤真知子『いたずらまじょ子の大冒険(5)』
- ・溝口涼子『オシャレ魔女 ラブ and ベリー』
- ・ゆうきあずさ『ウィッチクラフト109』

上記の7作品（『いたずらまじょ子の大冒険(5)』、『オシャレ魔女 ラブ and ベリー』、『ウィッチクラフト109』の3作品は漫画）は、最近出版された魔女を扱ったもののうち、よく読まれている作品であるが、そこに描かれている魔女のほとんどは、先に述べたような中・近世ヨーロッパの魔女やおとぎ話の悪い魔女の持つ暗いイメージとは無縁である。また、たとえば、『魔女館へようこそ』の主人公のあかりが、「魔法使いになりたいくてたまらない小学6年生²⁾」という設定であることからわかるように、魔女は恐怖の対象どころか、あこがれの対象ですらあるようである。

小論で取り上げる『らくだ魔女はプリンセス』は、「児童文学の未来をになうエンターテイナーを求める公募、ポプラ社 Dream スマッシュ! 大賞³⁾」の第1回受賞作品であるが、この作品における魔女のヒロインは、ヒロインとして好まれる最近の魔女像の傾向をよく表している。

4. 魔女としてのヒロイン

『らくだ魔女はプリンセス』においては、作品の舞台が魔法の国に限られている。従って、この作品の登場人物は、全て魔女や魔法使いであり、人間の世界とは全く接点がなく、作品にはひとりの人間も登場しない。魔女が登場する多くの日本の作品の場合、たとえば、古くは漫画『コメットさん』や『魔法使いサリー』などの場合、作品の舞台は主に人間の日常の世界であり、この世界において、主人公である魔女は、魔法を使うことができるという意味で、他の登場人物にはない能力を有しており、彼女は「超人的な」特別な存在となる。しかしながら、『らくだ魔女はプリンセス』は、魔法の国という、登場人物のすべてが魔法を使う世界における話であるため、ヒロインが魔女であることが、『コメットさん』や『魔法使いサリー』におけるような特別な意味を持たず、

魔女であるヒロインのフウカに異端者や稀人的な意味合いを見いだすことは不可能である。⁴⁾

『らくだ魔女はプリンセス』の主人公フウカは、魔女ではあるものの、登場人物すべてが魔法を使うことが出来るこの作品の世界においては、魔女というだけでは特別な存在ではない。また、フウカは、魔女であると同時に、銀の城のお姫さま（プリンセス）でもあるのだが、このことすらも、フウカと行動を共にするカリンとチトセがそれぞれ、緑の城のお姫さまと青の城の王子さまであるために、ほとんど特別な意味を持たないのである。また、魔法は、危機を脱する有効な手段として用いられているが、フウカ、チトセ、カリンそれぞれに得意な分野の魔法があり、『ハリー・ポッター』の主人公のハリーの場合とは異なり、主人公であるフウカがその圧倒的な魔法の力で、すべてを解決するというにはならないのである。⁵⁾

このような設定であるために、魔女でありお姫さまであるにもかかわらず、フウカは、特別で「超人的な」ヒロインでないどころか、魔法が使えること以外は、読者の子どもたちとなら変わるところがなく、このことが、読者のフウカに対する同一視をより容易にする。たとえば、フウカは、読者に向かって、「あたしもみんなといっしょで、算数は大ののがてなんだよね〜っ」(p.7)と告白する。また、フウカは、友人のカリンとチトセを誘って地の果てにある「人間界への入り口」を探す冒険に出かけるのだが、その理由は、その日の家庭訪問で、母親（銀の城の女王）が、先生からフウカが学校で「拡大魔法」の実習に失敗したことを聞いて、烈火のごとく怒り狂うのではないかと恐れたからである。そして、フウカの着ている制服は、伝統的に魔女が身に着けるとされる尖った黒い帽子やマントではなく、今の普通の小学生が着ているような「チューリップそでの白シャツにサスペンダー、黒いブリーツスカート」(p.32)である。さらに、フウカが「人間界への入り口」を見つけるために、地の果てにある恐ろしい「オオカミの森」に向かう際に示される「世紀の大発見よ！こんなの見つけたら、ママだって、ぜったいほめてくれるっ！パティ先生にも『らくだい』なんていわせないんだからっ！」(pp.25-26)というフウカの気持ちは、失敗をして母親にひどく怒られた経験のある小学生の読者には十分共感出来るものであろう。

魔女が主人公である作品で、日常的な人間の世界が舞台の場合、主人公である魔女は、魔法が使えるという点において、「超人的な」存在である。そのような作品におけるヒロインとしての魔女は、普段は普通の女の子として振る舞っているものの、その魔法の超人的な威力によって、人間の登場人物には不可能なことも可能であり、難題を解決し、時には他の人々の窮地をも救う。この時、魔女は、女性としてのジェンダーによる制約からも解放され、超人的な能力を持つ魅力的なヒロインとなるのであり、この魅力は、日常のヒロインと魔法を使うヒロインとの間のギャップが大きいほど高まるのである。これは、漫画『リボンの騎士』において、女性の主人公が、男装をして男性として振る舞うことによって、また、『美少女戦士セーラームーン』において、ヒロインたちが変身して闘うことによって、女性に科せられた社会的な制約から自由になり、男性以上の大活躍することにも通じるところがある。⁶⁾ この意味において、ヒロインが魔女であることは、ヒロインを容易にジェンダーから解き放つ仕掛けであるとも言えるのである。

一方、登場人物のすべてが魔法を使うことが出来る『らくだ魔女はプリンセス』においては、ヒロインが他の登場人物とは大きく異なる「超人的な」力を持っていることを意味しないため、ヒロインが魔女であることは、ヒロインを自動的にジェンダーから解放する唯一無比の仕掛けとはなっていない。この点で、『らくだ魔女はプリンセス』においては、魔女であることは、上に述べたような作品においてほどの意味を持たないと言ってもよいであろう。

とは言え、幼い少女であるフウカが、巨大グモにとらわれたチトセを救い出したり、恐ろしい「魔界の穴」を大きな岩でふさいだりというスケールの大きい活躍をすることが出来、読者がそれ

を違和感なく受け入れることが出来るのは、やはりフウカが魔法を使う魔女であることによるのは確かである。そのような意味で、『らくだい魔女はプリンセス』においても、ヒロインの魔女性は、程度の差こそあれ、女性の身体能力やジェンダーの制約からヒロインを解放し、ヒロインに思いう存分の活躍をさせる手段としても、必要とされていることは否定出来ない。

5. ヒロインとジェンダー

『らくだい魔女はプリンセス』においては、ヒロインのフウカが魔女であること以上に、ヒロインをジェンダー化された女性像とは全く異なる女性像として提示しようとする仕掛けがある。

第一に、伝統的な聖女と魔女という二極分化した女性像の提示と男性の視点の導入である。主人公フウカとその親友カリンは、両者とも作者によって好意的に描かれてはいるものの、互いに対照的な女性像として描かれている。カリンは因習的な理想の女性像を表し、フウカは、そのような因習的な女性像の枠からからはみ出した女性像となっている。具体的に言えば、カリンが、控えめで、従順で、人の身のまわりの世話が上手で、「女性らしい」特性を示すのに対して、フウカは、カリンのような「女性らしさ」にはほど遠く、活発で、主体的で行動力がある。

フウカのようなジェンダーにとらわれない女性像は、女性読者にとっては、好ましく痛快なものであることは言うまでもないが、この作品においては、チトセという男性（男の子）の視点を利用することにより、因習的な女性像とは異なる女性像への確かな肯定がなされている。フウカは、今まで気づいていなかったチトセへの好意を意識し始めた時に、「女らしい」気配りの出来るカリンの様子に、「やっぱ、男って、こういう家庭的な子がいいんだろうなあ」（p.112）と考える。ここには、女性が男性に好意を抱いた時に、男性が求めているであろうステレオタイプの「理想の」女性像を意識してしまう様子がよく表れている。しかしながら、フウカとカリンの女性性は、フウカのしわくちやのハンカチとカリンのレースのついた花柄のハンカチとによって象徴されているのだが、フウカとカリンの両方が好意を抱いているチトセが、けがをした際に、カリンのハンカチではなく、フウカのハンカチを求めるという事実、チトセがカリンではなくフウカの方により魅力を感じていることが示されている。このような男性の視点を通したフウカに対する好意的な評価によって、因習的な理想の女性像とはほど遠いフウカのような女性像に対する肯定が、より確固としたものとなっているのである。

第二に、ジェンダーの押しつけに対する女性の側からの不快感の表明があげられる。以下のフウカとチトセとの会話における、「女の子らしさ」の押しつけに反発するフウカの発言にも、フウカからジェンダーを排除する作者の意図が読み取れる。

「おい。おまえのハンカチかせよ」

「へ？ハンカチ？ハンカチなんてもってないよ」

「もってるだろー、フツー。女なんだから」

「ちょとー。そーゆー差別的なこと、いわないでくれます？青の城のひとって、ふっるいのよねー。そーゆーとこっ」（pp.44-45）

第三にヒロインのフウカが属性として持っている行動力と責任感である。このような特質は、元来男性の主人公に与えられることが多く、女性の主人公は、男性に助けられ庇護されるように描かれる場合が少なくない。因習的な女性像の枠におさまらないフウカは、従順で他者依存的な面を持つカリンとは異なり、「リーダー」として、みんなの士気を高めなきゃ」（p.81）というように、

自分が他者を導く立場にあるという意識を持っている。また、フウカはカリンとチトセを危険にさらすことになった責任は自分にあることを痛感して、自らの手で現状を打開しようとする。最後の恐ろしい「魔界の穴」を大岩でふさぐ場面では、フウカは、「なんとかしなきゃ……。あたしのせいだもんっ。あたしがなんとかしなきゃ！」(p.164)、「なんとかしなきゃ……。みんなをたすけるんだっ。ぜったいに！」(p.165)、「やろう……。っ、できるよきつと、集中して、自分を信じて！」(p.166)、「みんなを、ぜったい、たすけるんだ——！」(p.169)と自分を鼓舞して、必死に力を振り絞り、岩を魔法で大きくして穴をふさぐことに成功する。ここで強調されるのは、フウカの魔法の威力よりも、フウカの意志の強さや忍耐力、そして他者を守ろうとする責任感である。

6. おわりに

最近の日本における魔女の氾濫とも言える状況を見てみると、一部の大人向けのミステリー・ホラー作品などにはヨーロッパの中・近世的な魔女やおとぎ話の魔女のイメージが感じられる作品があるものの、ヒロインとしての魔女が最も好まれる児童文学や漫画においては、魔女は明るく元気な善意のヒロインとして登場することが多いことがわかる。(背景には、ここしばらく続いているファンタジーブームの影響もあるであろうが、魔女のヒロインを創造することで、ヒロインの行動に制約がなくなるのもその一因であろう。) そのような魔女はホウキに乗ったり魔法を使ったりすること以外は全く普通の女の子である場合が多く、そこには、中・近世的な魔女のイメージはおろか、グリム童話に出てくるような悪い魔女のイメージすら微塵も感じられない。それどころか、魔女であることが肯定的に、いやむしろ、魔女であることこそが素晴らしいことであるという捉え方をしている作品も少なくない。

小論で取り上げた『らくだ魔女はプリンセス』のヒロインも、このような魔女の一例である。しかしながら、ジェンダーの観点から見ると、この作品には、これまでの作品によく見られたような、魔法を使って一時的に「超人的な」働きを行い、その間はジェンダーなどのさまざまな制約から自由であるという魔女像からの変化の兆しを感じ取れる。すなわち、『らくだ魔女はプリンセス』においては、ヒロインが魔法を使うことによって、一時的に普通の姿からは想像もつかないような因習的な女性像とは異なる強い女性になるのではなく、ヒロインのフウカは、魔法を使わない状況においても、因習的な女性像とは異なる女性像として作り上げられているのである。そのため、魔法を使っていない普通のフウカと魔法を使っている時のフウカとの間には、全くと言っていいほど、印象の隔たりがなく、『らくだ魔女はプリンセス』においては、ヒロインが魔女であることは、ヒロインをジェンダーによる制約から解放する手段としては、もはや大きな意味を持っていないと言っても過言ではないであろう。

註

- 1) 池上俊一『魔女と聖女——ヨーロッパ中・近世の女たち』(講談社現代新書:1992) pp.16-17 参照。
- 2) 『魔女館へようこそ』(つくもようこ『魔女館へようこそ』(講談社:2006)) のカバーの内容紹介の文章は、この一文ではじまり、魔女に興味を持つあるいはあこがれる読者の興味を引くようになっている。
- 3) 成田サトコ『らくだ魔女はプリンセス』(ポプラ社:2006) に記載された著者紹介の内容か

ら抜粋。

なお、小論における『らくだい魔女はプリンセス』からの引用は、すべてこの版により、本文中にページ数のみを記す。

- 4) このような、ヒロインが魔女であることが彼女を特別な存在にしないような作品は、最近日本でも多くなる傾向があり、類似した外国の作品の例としては、イギリスの『ミルドレッドの魔女学校』があげられる。『ミルドレッドの魔女学校』は、『らくだい魔女はプリンセス』とは異なり、人間と魔女が共存する世界が舞台であるが、物語は主に、主人公の魔女が属している魔女学校で展開するため、登場人物のほとんどが魔女である。また、主人公のミルドレッドは、『らくだい魔女はプリンセス』のヒロインであるフウカ同様、決して優等生の魔女ではない。『ハリー・ポッター』も、魔法学校を作品の主な舞台にしているため、主人公のハリーが魔法使いであることがハリーを「超人」にすることはないが、ハリーの出自や並外れた魔法の力が彼を特別な存在にしている点で、フウカやミルドレッドとは異なる。
- 5) もっとも、フウカの魔女としての潜在能力の高さは、「フウカはね、あなた（銀の城の女王）の子だけあって、潜在能力ははかりしれないものがあるわ」（p.15）、「うちのじーちゃん（大魔法使いグラウディ）がいった。フウカはふしぎな力をもってるって。運命のもとにうまれた子で、魔法の国の未来を左右する人物になるらしーぜ」（p.98）というように示唆されているため、もしこの作品の続編が作られることになれば、フウカは、ハリー・ポッターのような、特別な能力を持った魔女になる可能性がある。
- 6) 谷口秀子「少女漫画における男装——ジェンダーの視点から——」『言語文化論究』, 15（九州大学大学院言語文化研究院：2002）.
谷口秀子「ジェンダーフリーと異形——絵本の中の女性像——」『言語文化論究』, 17（九州大学大学院言語文化研究院：2003）.

参考文献

- アーレント＝シュルテ、イングリッド（野口芳子、小山真理子・訳）『魔女にされた女性たち——近世初期ドイツにおける魔女裁判——』（勁草書房：2003）
- 池原しげと『魔女っ子メグちゃん』（イースト・プレス：2001）
- 高山栄子『魔界屋リリー 小さな天才魔女』（金の星社：2006）
- 武内直子『美少女戦士セーラームーン 新装版』（全12巻）（講談社：2003-2004）
- 谷口秀子「少女漫画における男装——ジェンダーの視点から——」『言語文化論究』, 15（九州大学大学院言語文化研究院：2002）
- _____「ジェンダーフリーと異形——絵本の中の女性像——」『言語文化論究』, 17（九州大学大学院言語文化研究院：2003）
- _____『ジェンダーを超えるヒロインたち——子どもの本における多様な女性像の提示を目指して——』（言語文化研究叢書：2004）
- つくもようこ『魔女館へようこそ』（講談社：2006）
- 手塚治虫『リボンの騎士』（全2巻）（講談社：1999）
- _____『リボンの騎士——少女クラブ版』（講談社：1999）
- 成田サトコ『らくだい魔女はプリンセス』（ポプラ社：2006）

- 野梨原花南『侯爵夫妻の物語～よかったり悪かったりする魔女～』（集英社：2006）
- 浜本隆志『魔女とカルトのドイツ史』（講談社現代新書：2004）
- 藤真知子『いたずらまじょ子の冒険（5）』（ポプラ社：2006）
- マーフィ, ジル（松川真弓・訳）『魔女学校の一年生——ミルドレッドの魔女学校（1）』（評論社：2002）
- _____『魔女学校の転校生——ミルドレッドの魔女学校（2）』（評論社：2002）
- _____『どじ魔女ミルの大てがら——ミルドレッドの魔女学校（3）』（評論社：2002）
- _____『魔女学校、海へいく——ミルドレッドの魔女学校（4）』（評論社：2002）
- マンチ, ロバート（加島葵・訳）『紙ぶくろの王女さま』（カワイ出版：1999）
- ミシュレ（篠田浩一郎・訳）『魔女（上）』（岩波書店：1983）
- ミシュレ（篠田浩一郎・訳）『魔女（下）』（岩波書店：1983）
- 溝口涼子『オシャレ魔女 ラブ and ベリー』（小学館：2006）
- 安田喜憲（編）『魔女の文明史』（八坂書房：2004）
- ゆうきあずさ『ウィッチクラフト109』（エンターブレイン：2006）
- 横山光輝『原作完全版 魔法使いサリー』（講談社：2004）
- _____『原作完全版 コメットさん』（講談社：2005）
- ローリング, J.K.（松岡佑子訳）『ハリー・ポッターと賢者の石』（静山社：1999）